

報告

二〇一八年度大会の概況

日本思想史学会二〇一八年度大会は、十月十三日（土）、十月十四日（日）の両日、神戸大学六甲台キャンパスを会場として開催された。

第一日目は、「日本思想史学の現在と未来」をテーマにシンポジウムが開催された。

報告

古代から中世へ

（東北福祉大学）富樫 進

中世から近世へ

（東京大学）頼住 光子

近世から近代へ

（立教大学）松田宏一郎

総括質問

（東北大学）佐藤 弘夫

（立命館大学）金津日出美

司会

（国際日本文化研究センター名誉教授）末本文美士

（早稲田大学）土田健次郎

シンポジウム終了後に総会が行われ、評議員より二〇一

七年度事業報告および決算報告がなされ、それぞれ承認された。続いて二〇一八年度事業計画および予算案が提出され、それぞれ評議員案通り決定された。また、会長から第十二回日本思想史学会奨励賞の発表と授与が行われた。受賞業績は次の作品である。

ニールス・ファンステーンパール『〈孝子〉という表象

―近世日本道徳文化史の試み―』

殷曉星「近世日本地方庶民教化における清聖論の活用

―『聖諭広訓』から『久世条教』『五條施教』へ―」

引き続き、社会科学系アカデミア館 三階レストランさくらにて懇親会が開催された。

第二日目のパネルセッション・研究発表の発表者と発表題目は以下の通りである。

〈第一部会〉

研究発表

1、九世紀日本における「鎮国家」と「護国家」

（佛教大学）佐藤 文子

2、寛永二十年の「新古之御改」をめぐる―徳島敬台寺を中心に―
(富士学林) 長倉 信祐

3、侍の士道論―『武教全書』の系譜から―

(西安外国語大学) 中嶋 英介

4、本居宣長の孔子観と『古事記』序文解釈

(筑波大学大学院) 河合 一樹

5、江戸時代における古方派医学思想の再考

(立命館大学大学院) 向 静

6、幕末梁川星巖における陽明学の受容

(関西大学大学院) 陳 慧慧

7、「敗者」側の功績と精神を後世に伝える―拙編『平

山省齋と岩瀬忠震』の狙い― (関西大学) 陶 徳民

パネルセッション

対外意識と王権論の転回―近世思想史の新しい「様式」

を目指して―

(防衛大学校) 井上 泰至

(中央大学) 大川 真

(海陽中等教育学校) 濱野靖一郎

(大阪大学) 山本 嘉孝

〈第二部会〉

研究発表

8、明治期の漢学改革論について

9、徳富蘇峰の身代わりとしての福沢諭吉
(東京大学大学院) 水野 博太

(静岡県立大学) 平山 洋

10、〈両輪〉としての徳育と知育―教育勅語成立前後の

帝国大学― (東北大学大学院) 佐々木隼相

11、近代女子教育思想における国家主義と個人本位の傾

向―下田歌子と津田梅子を中心として―

(関西大学大学院) 孫 東芳

12、アジア主義と世界主義―沢柳政太郎の日華共存論を

中心に― (東北大学大学院) 楽 星

13、田中王堂と「近世文明」

(学習院大学大学院) 山田大生

14、近代日本の「批評」を問い直す―大西祝と戸坂潤―

(東京大学大学院) 郭 馳洋

パネルセッション

日本思想史としての神仏分離・廃仏毀釈

(東北大学) オリオン・クラウタウ

(愛知学院大学) 林 淳

(フートルダム女学院中学高等学校) 池田 智文

(金城学院大学) 桐原 健真

〈第三部会〉

研究発表

-
- 15、『政治教育講座』における水野鍊太郎の政治思想
（日本学術振興会）西田 彰一
- 16、「東洋的専制主義」概念の形成史―昭和前期の議論
を中心に―
（大阪大学）周 雨霏
- 17、転向者の浄土真宗信仰―一九三〇年代後半期の京阪
地方を中心に―
（東京大学大学院）佐々木政文
- 18、帝国日本の統治技術―東郷実「民族心理（学）」小
考―
（漢陽大学）佐藤太久磨
- 19、思想史と概念史―「内なる近代化」研究の視座から―
（京都市学校歴史博物館）和崎光太郎
- 20、丸山眞男と竹山道雄―一高体験と戦後の転換―
（熊本大学大学院）福岡 大祐
- 21、戦後思想としての大衆文化論―鶴見俊輔と佐藤忠男―
（京都大学）花田 史彦
- 22、山崎豊子への新しいアプローチ―「戦争三部作」を
中心に―
（関西大学大学院）李 瑞華

新入会員（二〇一八年十月以降承認。受付順・敬称略）

氏名

所属等（専門分野）

伊藤 貴雄 創価大学教授（近代ドイツ哲学とその影響作用史）

渡 勇輝 佛教大学大学院（神道史）

小堀 知輝 株式会社OTSU（丸山眞男における認識論と思想史の考え方）

猪原 透 立命館大学非常勤講師（大正期における社会科学史）

谷 雪呢 京都大学大学院（橘樸の中国研究と協同組合運動）

久保田 實 佛教大学大学院（日本仏教における論義の研究）

黒田 秀教 大阪大学教務補佐員（日本漢学、日本祭祀思想史）

木村元太郎 九州大学大学院（真宗教学）

山中 美樹 聖学院大学大学院（三木清における「東洋」と「西洋」・「伝統」と「創造」を持つ可能性）

亀山 光明 東北大学大学院（近代仏教）

中川 優子 東京学芸大学大学院（近世を中心とする日本の音楽思想）

ロバート・クラフト 筑波大学大学院（近代日本思想史）

高原 智史 東京大学大学院（日本近代思想史・高等教育史）

桑山 隼人 北九州市立大学大学院（日本宗教史（陰陽道））

李 璐 筑波大学大学院（和辻倫理学）

榊田 夏織 同志社香里中学校・高等学校教諭（猪飼敬所の考証学について）

井澤 耕一 茨城大学教授（日中両国の近世から近代における経学史研究）

増田 友哉 東北大学大学院（近世国学における人間理解）

【『日本思想史学』編集・公開規定】

- 一、日本思想史学会（以下、本学会）の学会誌は『日本思想史学』（以下、本誌）と称する。
- 二、本誌の編集には本学会の編集委員会があたる。
- 三、本誌各号の投稿論文に関する規程（「投稿規程」）は、各号ごとに編集委員会が定め、前号に掲載する。
- 四、本誌は、年に一回、毎年九月三〇日に発行する。
- 五、第五一号以降の本誌に掲載される記事の著作権は、それが掲載号発行の時点で本学会の会員資格を有する者の著作物である場合、本学会に帰属するものとする。
- 六、第五一号以降の本誌への非会員の寄稿については、編集委員会が、寄稿の際に、寄稿者から、電子公開の許諾等を得るものとする。
- 七、第五一号以降の本誌に掲載される記事は、発行翌年の一〇月一日に、本学会ホームページで電子公開する。
- 八、本誌第一―五〇号に掲載された記事の公開許諾については、別途定める。

【投稿規程】

『日本思想史学』第52号掲載論文の投稿を、左記の要領にて受け付けます。

一、応募資格

二、内容

三、書式・分量

本学会員であること。ただし第51号に論文が掲載された者は、応募資格を持たない。また、二〇一九年度（二〇一九年一〇月―二〇二〇年九月）分の会費を納めていない者の投稿は受け付けない。日本思想史学に関するもの。

・投稿論文の書式・分量は、A4判・横方向・縦書き・四〇字×三〇行・一〇・五ポイントで、注を含めて、一七枚以内とする。下部中央にページ番号を入れること。

・注は文末注とし、本文と同じ書式とすること（行を詰めたり、ポイントを下げたりしないこと）。

・図・表等は、学会誌の判型（A5判）の用紙に印刷して、本文に添付すること（ただし、図・表等に充てる頁数に相当する文字数の分だけ本文の分量を減らすこと。学会誌の書式は、一頁あたり、二六字×二二行×二段である）。

四、提出書類

① 正本一部、副本四部。
② 正本には、日本語および英語の論文タイトル、氏名およびそのローマ字表記、所属、職名、住所、メールアドレスを記載した文書を添付すること。

③ 八〇〇字以内の論文要旨五部。

二〇二〇年三月三十一日消印有効（郵送に限る。宅配便の場合はこれに準ずる）。

五、投稿締切

六、送付先

〒五六〇―八五三二

大阪府豊中市待兼山町一―五
大阪大学大学院文学研究科 宇野田尚哉研究室内
日本思想史学会事務局

* 完成原稿で提出してください。

* 論文の審査と採否決定には、編集委員会があたります。

* 本誌に掲載された論文等の著作権は、本会に属します。

【編集後記】

本号には、二〇一八年度大会シンポジウムの「特集」、パネルセッションにもとづく「特別掲載」のほか、「投稿論文」「書評」を掲載しました。「研究史」等についても編集委員会では主題と人選を議論し、原稿依頼も行ったのですが、残念ながら掲載に至りませんでした。

「投稿論文」の総投稿数は一六本（古代二本、中世二本、近世三本、近現代九本）で、そのうち六本を掲載いたしました。書式や分量、会費納入の面で投稿規程に違反している原稿が過半を占め、その中には論文ではないものも一本ありました。規定を厳密に適用し、違反しているものは不掲載という判断もあり得たのですが、今回は編集委員会で相談の上、規定違反のものはハンデをつけて審査し、採用となった原稿には規定に沿った書き換えをお願いしました。次号に投稿なさる方は、ぜひ投稿規程を確認の上でお願いいたします。また、本号に掲載されている「編集・公開規定」にもご留意願います。

「書評」で取り上げる対象は、原則として二〇一八年四月から二〇一九年三月の間に刊行された会員の著作一覧を私に作成し、慎重に選びました。例年のことながら、執筆期間は決して長いとは言えず、依頼した方々は御苦労があったことと思いますが、無事全ての方が原稿を提出して下さいました。改めて心から感謝申し上げます。

総会で議論のあったとおり、学会の現状に鑑み、会誌も多少の経費節減が求められています。それに対応しつつ、最新の成果と多様な内容で編集を行うことが理想です。今期の編集委員会は、未経験の比較的若手を中心となり、議論をしつつ編集作業を進めました。次号に向けて、さらに努力していきたいと思えます。

(S)